

同窓会会報

高知県立大学看護学部

第26号

令和5年4月13日発行

〒781-8515 高知市池2751-1



ごあいさつ

同窓会副会長 中野 綾美



池キャンパスから眺める山々の桜が咲き始め、春が来たこと、新年度が始まることを実感しています。会報26号をお届けする時期となりました。同窓生の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を取りながら社会活動を活性化していく状況の中で、どのようにバランスを取りながら日常を取り戻していくか、新たな課題に取り組んでおられることと思います。

3月20日、感染予防対策を取りながら4年ぶりに高知県立県民文化ホールで保護者の方々のご臨席のもと、卒業式・学位授与式が行われました。野嶋佐由美学長からはなむけの言葉「挫折を恐れず、自分自身の力と感性を信じて、人々と共に創造する生き方を選び取ることを期待しています」を胸に、看護学部卒業生80名、看護学研究科博士前期課程20名の修了生が、力強く自分の選んだ道に飛び立ちました。看護学部同窓会は、会員2,738名となりましたことをご報告いたします。同窓会の皆様からの学生の活動支援、就職支援、そして学生が看護実践能力・研究能力を身に付けることができるように感染予防対策を行いながら学生を受け入れていただいたこと、心から感謝申し上げます。卒業生・修了生から「充実した学生生活でした」、「高知県立大学看護学部で良かった。看護学研究科を選んで良かった」という声が届いています。インドネシアからの留学生Mutiarra Syagittaさん(災害・国際看護学領域)が大学院修了生を代表して答辞を述べられました。同窓会のネットワークは、海外にも広がっています。同窓会からは、記念として、高知県立大学看護学部同窓会のネームと校章・看護学部のロゴが入ったモバイルバッテリーを贈らせていただきました。卒業生・修了生の皆さんは同窓会の大切な一員であること、同窓会はいつも応援している身近な存在であるという思いを込めています。

3月で野嶋佐由美学長が退任されます。野嶋佐由美先生は、高知女子大学家政学部看護学科の時代から今日まで39年間、大学・看護学部・看護学研究科を牽引し続けてくださいました。池キャンパス移転後、看護学部・看護学研究科の充実・発展に尽力された山田覚教授(25年間)、森下安子教授(24年間)が定年退職されます。そして、先生方は4月から特任教授としてお力添えくださいます。先生方の長年にわたるご功績に敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

新年度がスタートします。長年の努力で培ってきた財産・同窓会のネットワークを、私たち同窓生一人一人が大切に、さらに豊かにしていきましょう。

教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ

大学の活動と高知女子大学同窓生とのかかわり ～25年を振り返って～

山田 覚先生



25年前の3月、それまで一度も訪れたことのない高知に赴任しました。長野県生まれの私にとっての第一印象は、「暖かい所だな」、でした。4月から大学教員としての仕事が始まりましたが、当時男性教員は2人のみで、他の女性教員は全員が本学の卒業生でした。さすがに伝統のある高知女子大学だと感心したことを思い出します。単なる先輩と後輩の関係ではなく、同じ理念のもとに看護学を学んだ同志として、日常の教育・研究活動が進められていることを、その後時間経過とともに感じることができました。現在の教員の数は、当時の2倍弱となり、この25年間の学部および研究科の発展が伺えますが、そのベースには、臨機応変にプロジェクト形式でチームを編成し、果敢にチャレンジして来た地道な活動によるものだと思います。ここでも、同窓生の力の結集を見ることができました。

赴任した年の9月下旬に、高知'98豪雨水害に遭遇しました。看護管理学が専門であったのでそのなかのリスクマネジメントの視点から、災害というものを捉える機会になりました。初冬には、兵庫県明石市の当時の兵庫県立看護大学(現兵庫県立大学)で、同窓生の南裕子先生を大会長として第1回日本災害看護学会年次大会が開催されましたが、高知'98豪雨水害を体験した私は、自然の流れとして当該学会に参加することとなりました。その後私は、高知で日本災害看護学会年次大会の大会長となり、南先生が理事長をされていた時に副理事長を務め、そして次の期に南先生の役割を引き継ぎ理事長を拝命することとなりました。工学部出身の私が看護系の学会の理事長になってもよいものかと一時悩みましたが、高知での水害の経験と、同窓生の南先生との出会いから、何か既に見えないルールが敷かれているかの様に感じ、お引き受けすることにしました。高知'98豪雨水害を契機に高知県災害看護支援ネットワーク検討会を発足させ、看護学部では発足当初からプロジェクトを立ち上げ、本ネットワーク会議の運営を担当してきましたが、丁度このころ活動の成果として、県と県下の全市町村および看護協会の三者による、全国的にも希に見る画期的な災害看護協力協定を締結することができました。このネットワーク会議には、同窓生が看護部長等を務める病院からも、担当者が派遣されていました。特に、組織における災害時の活動には、ネットワークがキーとなると言われています。

私の高知での教員としての25年間は、リスクマネジメントに関わる活動でした。東日本大震災以降は、5大学による共同災害看護学専攻の博士課程の設置、文部科学省の助成終了後には災害・国際看護学領域の立ち上げと充実した日々を過ごさせていただきました。徐々に災害看護学を専門とする同窓生が増え、先に述べた災害看護のネットワークが、同窓生によって構築されることを期待しています。



教員としてご指導いただいた先生からのメッセージ

森下 安子先生(26期生 博士7期生)



母校である高知女子大学看護学部の教員として平成11年に着任して、気が付けば24年間が経過し、令和5年3月末日で定年退職を迎えることができました。同窓会の皆様、大学関係者の皆様のご支援のおかげと感謝申し上げます。私が教員への道へとシフトした理由は、その時は“人生80年時代(今は「人生100年時代」ですが)で、人生の折り返し地点にたっていた自らの保健師生活を振り返ると、ともすれば経験重視になりがちになっていたことを反省し、理論や根拠に基づいた活動を展開する未来の保健師を育成するとともに、大学教員だからこそ、第三者の視点実践現場に入りともに活動し看護の役割を発揮できるようバックアップができるのではないかと考えるようになりました。さらに、母校の先生方の後押しもあり高知市役所を退職し、大学院への進学、看護教員の道を選択したことを今も懐かしく思い出します。

さて、私の教員生活の中で、長く関わった事業は「入退院支援事業」で、まさしく実践現場の方々と協働して取り組む事業です。本学は大学の理念として「域学共生」を掲げています。「域学共生」とは、地「域」と大「学」が「共」に「生」きていくための協働関係を築き、「大学が地域を変え、地域が大学を変える」という考え方で、教員・学生自らが地域の課題を認識し、高知県の政策の方向性に従って地域課題に取り組み、教育・研究機能をいかした課題解決の方策について政策提言に取り組んでいます。「入退院支援事業」は高知県が掲げる「日本一の健康長寿県構想」に基づき、本学が提案し、平成28年度から高知県の事業として位置づけられ、今も事業展開を継続しています。本事業は、円滑な在宅生活への移行を目指して、入院から退院に至るプロセスにおいて継続して、地域と病院が多職種で協働して退院支援する仕組みを作る事業です。この事業は、平成22年に本学卒業生である保健所保健師の相談からスタートしています。そして、平成5年度まで高知県下15の医療機関とその医療機関がある市町村等に入らせていただきました。この事業が開始、そして長く継続、発展している理由は、そこに高知女子大学、高知県立大学の卒業生、修了生、まさしく同窓会のメンバーが勤務しており、大学とタッグを組んで協働して事業を推進してくれたからです。改めて、同窓生のネットワークが本学の宝でパワーなのだ実感しています。

看護学部同窓会は、このように母校と同窓生、そして同窓生同士をつなぐ重要な役割を担ってくれています。これからも、看護学部同窓会のますますの発展を期待しています。



ようこそ先輩！

これまでのキャリアを振り返って、今思うこと

鈴木 志津枝先生(22期生)
兵庫医科大学看護学部教授(4月1日より神戸常磐大学保健科学部教授)



高知女子大学卒業後、47年が経過しました。この機会に私のキャリアについて振り返ってみたいと思います。私は大学卒業後に出身地の大学病院で看護師として3年間勤務しましたが、当時、終末期がん患者の家族援助の方法や今後どのようにキャリアを積み重ねていけば良いか悩んでいました。思い立って高知女子大学の恩師に相談に行き、助言により大学院修士課程へ進学することになり、臨床での課題であった終末期がん患者の家族に関する研究を行いました。恩師への相談が転機となり、その後の私のキャリア発達を方向づけたと思います。

その後、4年間の臨床経験や6年間の看護教育経験を経て、もっと学びたいという思いに突き動かされて米国の大学院博士課程に進学し、私のライフワークである死別後の遺族のグリーフに関する研究を行いました。博士課程終了後に、高知女子大学で大学院教育やがん看護教育をスタートさせ、引き続き神戸市看護大学や兵庫医科大学で教育を継続してきましたが、本年3月で兵庫医科大学を退職し大学院教育を終えることにいたしました。兵庫医科大学を退職するにあたり、「高度実践看護師を育てるということ～24年間の専門看護師教育を振り返って～」をテーマに最終講義を行いました。これまでの教育を振り返り、がん看護専門看護師(CNS)を育成する教育者に求められる能力として、がん看護CNSに必要な知識や技術を教育する能力とともに、がん看護CNSになれるように教育する能力、すなわち、院生の能力を見出し強化する支援、ころが折れても復活できる力を育てる支援、役割を遂行する能力を強化する支援、ネットワークを広げる支援を行う能力が大事だと思いました。がん看護CNS教育は、院生にとって自分の能力と向き合うことでころが折れそうになることも多々あります。そのようなとき、あきらめない力を育てていくことが大切だと考えています。「教育とは引き出すものであるか、育てるものであるか」という言葉のように、がん看護CNS教育は、院生の学びたいという気持ちを引き出し、自らが看護学を探究する人を育てることだと思っています。教育は自分の人生を豊かにしてくれ、教員にとって育っていった人を見ることは人生における楽しみであると思っています。

最後に、高知県立大学の同窓会会員の皆様のご健勝と高知県立大学の益々の発展を祈念しております。

40年前に始まった看護人生は、まだ継続中……

小迫 富美恵先生(28期生)
横浜市立市民病院 看護部



28期生の私たちは、2019年の夏にクラス会で、高知に集まった。還暦という実感はなかったものの、様々な経験を語り、40年という時間が各々に確かにあったのだと思う。それに刺激され、断捨離をしなければ！と倉庫と化した部屋の片づけに手を付けてしまった。久しぶりに実習ノートなるものを見つけて、一気に40年前に吸い込まれてしまった。

私にとっては、大学の看護実習で出会った初めての患者さんのことが、これまでの看護への探求を支えてくれていると思う。実習では助手の先生方と学生が、自由に看護への思いを語り合い、時には、喫茶店で夜中まで、付き合っていたものだ。同窓生とのかけがえのない時間、実習ノートに残る小さなコメント一つ一つが、心細い看護学生の私を支えてくれた。その答えを考え続けるために私は、「がん看護」の道を選んだ。スタートは、がん専門病院、在宅ケアシステム立ち上げへのチャレンジ、その間2回母校に教員として帰っているが、後半は、臨床の場に戻って2020年3月に定年退職となる予定であった。

しかし、突然のコロナ禍となり、あえなくがん看護専門看護師としての看護人生は終わった。今、再任用となり、3年過ぎたが、日々を乗り越えることだけで、この間の記憶は断片的である。気づけば、特定行為研修担当として、新たな事業に携わっている。日本のAPNIはこの先一体どうなるのだろう。この感覚は、20年前のCNS制度の始まりの時に味わったものと似ている。あの時は、当事者として、CNSの実践を自ら創り出す側だった。今回は、特定行為研修の教育支援の役割として、この先のスペシャリストの行方を案じている。受講生に不利益が起らないように、教育するだけではなく、活用の道を考えること。様々なリソースナースたちがつぶれないように、そして、疲弊したジェネラリストナースたちの支えとなり、日々の看護のやりがいを取り戻せるように次世代に継ぐことに残りの時間を注ぐつもりでいる。同時にワークライフバランスのライフを考える時間を大切にしたいと思っている。まずは、実家を拠点として、今まで気づけなかった故郷のパワースポットの再発見というところかもしれない。

幅広い領域で活躍する修了生

小菅 樹里さん(47期生 修士23期生)
高知市南街北街江ノ口地域包括支援センター



高知県立大学看護学部の先生方には、本市の新型コロナウイルス感染症対策におきまして、多大なるご支援をいただきまして、心より感謝申し上げます。陽性者の方が急増し、入院調整やクラスター対応、自宅療養者への支援が重なり、大変な状況の中、先生方からのサポートをいただくことができ、大学との繋がりを心強く感じました。この場をお借りし、重ねてお礼申し上げます。

私は、高知女子大学家政学部看護学科(現 高知県立大学看護学部)を卒業し、平成13年に高知市の保健師として入庁、現在は、直営の地域包括支援センターの保健師として勤務をしています。地域包括支援センターは、高齢者が住み慣れた地域でいきいきと暮らし続けられるよう、住まい・医療・介護・生活支援の一体的なサービスを提供する地域包括ケアシステムの構築を目指し、高齢者の総合相談窓口として日々業務を行っています。

地域包括支援センターは、高齢者の担当部署ではありますが、地域を回っていると、高齢者・障害者・母子などの分野ごとの区切りはなく、多種多様な困りごとを抱える人に出会います。1つの世帯で複数の課題を抱えていることもよくあり、自分たちの部署だけでは解決することができない問題に多々直面し、改めて、地域共生社会の実現、多職種連携の重要性を認識しています。

また、地域に出ると住民力の素晴らしさを発見します。住民主体の介護予防活動「いきいき百歳体操」をはじめ、サロン活動、見守りやちょっとしたお手伝いをするボランティア活動など様々な活動があります。住民自身が自分たちの地域に必要なことだと感じ、自ら取り組む活動は、行政にはない柔軟な発想で、その地域に合ったアイデアを出し合いながら、住民ならではの活動を行っています。

私たち保健師の役割は、住民の「やりたい」を叶えるために、寄り添い、共に考え、住民力を信じて、サポートすること、そして、住民をはじめ、地域にある様々な関係機関とパートナーシップを築きながら協働することだと思います。立場や職種を超えて、様々な人と繋がりがながら活動していくことができればと思いますので、今後ともお力添えをいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

初心にかえって

三宮 優子さん(54期生 修士18期生)
高知医療センター

私は、高知県で生まれ育ち、高知女子大学(現:高知県立大学)を卒業後、高知医療センターで看護師人生をスタートしました。新人看護師の頃は、先輩方から見ると「ふわふわしてる」「吹けば飛んでいきそう」と、とても頼りなく心配になる後輩だったそうです。心臓血管外科病棟と集中治療室を経て、8年目の年に高知県立大学大学院に進学しました。大学院では、多くの方と知り合い、環境にも恵まれ、様々なことを経験させていただきました。学会や他大学での研修に参加し、そこで知り合った友人、諸先輩方とは今でも連絡を取り合っています。コロナ禍では、県外の施設に見学に出向くのも難しい状況ですが、大学院生の頃の私は、貴重な経験をたくさんさせていただきました。

大学院修了後は、集中治療室に復職し、急性・重症患者看護専門看護師(CCNS)として未熟ながら様々な役割を担わせていただきました。研修を担当することで、院内だけでなく、県内の様々な施設の方にお会いする機会があり、とても刺激的な毎日を送っていました。また、コロナ禍という時代の流れにのり、多種多様な部署、スタッフの方々とお仕事を共にしてきました。そして、この春からは、循環器内科・心臓血管外科病棟で働いています。「ふわふわ」していた頃の私を知る先輩はほとんどいませんが、配属先の病棟は、私にとって「原点」であり、初心にかえられる大切な場所だと感じています。10年ぶりの一般病棟に、ポンコツぶりを発揮しつつ、新人看護師の頃に感じた看護のおもしろさを再び感じる事ができ、とても楽しく仕事をしています。



私は、「CCNS」と名はついていますが、何か特別なことができるわけではありません。当初は(いや今でも)、CCNSは最前線で活躍するキラキラした存在だと思っていました。しかしながら、一スタッフとして働く私は、同僚と一緒に毎日汗かくで、髪の毛を振り乱しながら業務に追われ、思い描いたキラキラとはかけ離れた日々を送っています。私は、「みんなで楽しく前向きに仕事がしたい」と思い、そのための知識や技術が自分に必要だと感じて大学院を目指しました。今は、どんなに忙しくても、嫌なことがあっても、共に働くみんなと一緒に、やりがいのある楽しい看護師人生が送れるように、今、自分にできることをやっと思いと思っています。最後に、とりとめのない話ですが読んでくださった方が、前を向くための小さなきっかけになれば幸いです。(写真:集中治療室を去る日の1枚、中央が三宮さん)

フレッシュに活躍する卒業生

「看護師として働いて」
広島大学病院
東 晃平さん(68期生)

ICUは、小児から高齢者までの全年齢、全分野の重症患者が搬送されてくる。配属されて一番の感情は、「怖い」だった。CPAでの胸骨圧迫、緊急処置の準備と介助など、時間との闘いで、一瞬の判断力と行動力が必要になる。日を重ねるにつれ、受け持ち患者の重症度も上がり、緊張感を持ちながら業務をしている。



その中で、まだ一年間ではあるものの、決断力、度胸が身についたと強く感じている。患者が急変することが多いため、患者にとっての一番の問題点と注意点、考え得るトラブルとその対応について常に考える意識があった。ICUに入室している患者は意識レベルが低下している方が多いため、最も患者と関わる機会が多い看護師のアセスメントがとても重要になる。その中で患者の急変前の前駆症状や違和感にいち早く気づけた時や回復して疎通が図れるようになり患者に感謝された時がやりがいになっている。毎日多くの事を学べる今を大切にこれからも頑張っていきたい。

「保健師として働いて」
福山市保健所健康推進課
岩打 紗歩さん(68期生)

私は、福山市保健所健康推進課の精神歯科担当で保健師として働いています。市民向けの講演会や幼児健康診査などの事業を担いながら、担当地区の住民の方が健やかに過ごせるように支援をさせていただいています。



特定妊婦、精神疾患を持ちながら地域で過ごす方、高齢者虐待など、様々な方に関わらせていただいた1年間でした。保健師に関わる方は多くの方が生きづらさを抱えており、信頼関係を築くまでに時間がかかることもありましたが、訪問を重ねることや真摯に会話をすることで、徐々に信頼関係が出来ていき、「ありがとう」と感謝された時はとてもやりがいを感じます。また、様々なケース対応が重なった際は、初めてのことでどうしていいかわからず、悩んだこともありましたが、そのような時は、職場の先輩や上司、関係者の方の助言や協力が私を支えてくれました。

2年目になりますが、まだまだわからないことが沢山あります。2年目だからといって、1人で抱え込まずに、しっかり周りや相談しながら、地域の方により良い支援を行えるように励んでいこうと思います。

「助産師として働いて」
高知医療センター
小松 未羽さん(68期生)

助産師として働いて約1年が経ちます。この1年間はあっという間でした。私は、総合周産期母子医療センターという、合併症妊娠、胎児異常など母児におけるリスクの高い妊娠に対する医療および高度新生児医療等の周産期医療を行っている施設で働いています。入職してからの日々を振り返ると、とても充実した時間を過ごしていたと思います。



毎日慣れない業務を遂行しながら、新しい知識を習得したりすることは想像以上に大変でした。患者さんに対して十分な看護が提供できているのか、自分の知識、経験不足に悩むこともありましたが、先輩方や患者さんのおかげで新しい発見があり、周りの支えを常に感じながら働くことができています。まだまだ未熟ではあるので、同期と共に尊敬できる先輩方の背中を追いながら、日々貪欲に吸収できることを吸収していきたいと思っています。

「養護教諭として働いて」
高知県立高知東工業高等学校校定時制・養護教諭
橋村 穂乃香さん(68期生)

高知県立大学を卒業して、あっという間に1年が過ぎ、早くも社会人2年目が近づいてきました。採用当初は、右も左も分からず、本当にこれで正解なのか？という不安を常に持ちながら、健康診断や生徒対応といった業務にあたっていました。今でも不安はありますが、同期やベテラン養護教諭の先生、周りの教職員の方々、時には生徒にも助けてもらいながら、毎日楽しく仕事をしています。



本校の定時制は、夜間に授業があるということもあり、不登校経験者や特性を持つ生徒など、様々な事情を抱えた生徒が在籍しています。そのため、生徒理解には特に注意が必要なのですが、経験の浅い私にとって、大学で学んだ様々な理論や実習等で鍛えた多角的な視点から対象をアセスメントする姿勢が生徒理解での力強い味方となってきています。また、大学時代に学友と協力し合って四苦八苦と培った看護の力は、自分の財産だと感じる日々です。まだまだ自身の力不足を痛感するばかりですが、今後も県立大学で学んだことを活かしながら、養護教諭として学び続けていきたいと思っています。

同窓会による学生・卒業生活動支援

日本家族看護学会第29回学術集会を終えて

第一薬科大学 看護学部
濱田 裕子(博士後期課程2期生)

日本家族看護学会第29回学術集会を3年ぶりに現地(2022年9月10日～11日)と部分ハイブリッド(一部ライブ配信,オンデマンド配信;2022年9月16日～10月31日)で開催いたしました。メインテーマは「家族のものを語りを紡ぐ～現場発信の家族看護」とし、現地、福岡国際会議場には2日間で800名の方が来場し、会期中は924名が参加され、皆さまのご支援により、無事に開催することができましたこと、心より感謝申し上げます。

学術集会のお話をいただいた時は、COVID-19以前の2019年で、このような社会状況になるとは思っていませんでした。2020年の第27回は完全オンラインへ変更になり、第28回も第5波で、予定されていたハイブリッド開催には至らず、両大会長のご苦勞を思いながら、第29回の先行きは不透明な中で準備をしました。

日本家族看護学会学術集会を九州で開催すること自体、初めてで、第25回大会長の長戸先生、事務局の先生方にもアドバイスをいただき、2021年3月から企画委員会をスタートし、委員の先生方と鋭意努力をして参りました。演題登録の時期は第6波で、学術集会時は第7波のなかで、まさにwithコロナで、開催形態と予算を天秤にかけながら、困難な状況をいかに乗り越えるかの課題を与えられた一年半でした。

しかしながら、皆様のご協力のもと、一般演題73演題(口演31, 示説42)、交流集会12セッション、委員会企画6セッションの登録をいただき、メインプログラムは、下記のような多彩な内容で構成することができました。



プログラム名	タイトル/ 演者 (敬称略)
会長講演	家族のものを語りを紡ぐ/ 濱田 裕子
特別講演1	あいまいな喪失と家族支援/ 石井 千賀子
特別講演2	家族の“はじまり”を支える/ 豊島 勝昭
教育講演1	家族看護実践力を高める～家族看護エンパワーメントモデルの活用/ 中野 綾美
教育講演2	ビジュアル・ナラティブと支援/ やまだ ようこ
学術集会長企画	グリーンケアとしてのエンパワリングの実践/ 宇屋 貴
シンポジウム	家族看護の現場からの発信～実践と課題～ 大島 昌子 / 畠山 卓也 / 山下 郁代 / 竹熊 千晶
シンポジウムⅡ	家族の語りから学ぶ 木下 昌子 / 川口 有美子 / 添田 友子、(やまだようこ/指定発言)
市民公開講座	あなたは子どもに何を遺せますか? / 安武 信吾
ミニシアター / 協力Hope & Wish	GIVEN～いま、ここに、あるしあわせ～(難病の子どもとその家族へ夢を)
ランチョンセミナー / ミヤリサン製菓	長寿研究から見てきた食・腸内細菌・健康連環 / 内藤 裕二
ランチョンセミナー / CSLベーリング	小児がんの治療と免疫グロブリン補充療法 / 古賀 友紀
スポンサーセミナー / TEAMフットサポーターズ	思いを看取るフットケア～フットケアの魅力を看護キャリアに活かすために

また、今回は、2022年4月に日本家族看護学会が一般社団法人化したことを記念して、学会本部と第29回学術集会のコロナ企画として、交流会を開催しました。歴代理事長のルーメッセージに続き、現役医師による音楽ユニット“inshert”(インシャート)によるミニコンサートを企画いたしました。和やかな雰囲気の中で、歴代理事長の先生方のご苦勞、家族看護学会への想いに触れ、私自身、学術集会長を務めさせていただきましたこと、大変光栄に感じました。

最後に、参加者の皆さま、演者や座長の先生方、理事や評議委員の先生方のご協力や同窓会からの卒業生活動支援をはじめ、企業や団体、助成金等、多くのご支援をいただき感謝申し上げます。関係者の皆さまにはご心配ご不便をおかけし至らぬ面もあったかと存じますが、家族看護学会らしい暖かい学会だったとお声をかけていただき、アンケートでも良い評価をいただきました。関わって下さった全ての皆さまに感謝を込めて、ありがとうございました。



看護学部は今

紅葉祭

3年生 長崎 穂波さん

今年度は、対面で大学祭を開催したいという思いから、新型コロナウイルス感染症への対策を十分に講じた上で、3年ぶりに対面での開催をすることができました。体育館や野外で行われたステージでは、学生バンドやお笑いショー、また三山ひろしさんによるステージなど、学生のみならず、地域の方々も大学に足を運び楽しむことができる企画が多数実施されており、老若男女問わずたくさんの方々の笑顔を見ることができました。

私が大学祭実行委員を志望した理由は、一から学生間で協力し、作り上げる大学祭に魅力を感じ、大学祭を支える運営に関わりたと思ったからです。事前の仕事内容として、私は協賛して下さる企業様にアポイントを取るなど、社会に必要な体験をさせていただきました。また当日は、ステージ出演者の誘導や警備などを行いました。ステージが円滑に進んでいくようタイムスケジュールに配慮しながら他実行委員とも協力し、事無く大学祭を終えることができました。

大学祭実行委員を行ってみて、日程の関係での話し合いの機会がなかなか作れないなど、苦労した点は様々あり、至らない点も多数あったと思いますが、たくさんの方々が楽しむ様子を見て、大学祭を創り上げるために自分なりに積極的に取り組むことができて、良かったと感じました。また、学祭を開催するにあたり、教員の方々のご指導やご支援のみならず外部の方々にも沢山のご支援をいただくなど、沢山の方々の協力の上での開催であったと感じています。大学祭に関わって下さった方々への感謝を忘れず、これからの大学生活も実りあるものにしていきたいです。



健援隊Smileプロジェクト

代表:2年生 河添 陽菜さん

健援隊Smileプロジェクトは、本学の立志社中の活動の1つです。健援隊は、看護の専門知識をわかりやすく地域の方に伝え、知識の普及と健康文化の醸成を目的として、2013年から活動を継続しています。現在は、看護学部、健康栄養学部のメンバー29名で活動しています。今年度は香美市柳瀬地区、神池地区での「高齢者健康推進活動」、柳瀬地区での「防災活動」、五台山保育園での「小児健康推進活動」を通して住民の方々に笑顔になってもらえるように健援隊Smileプロジェクト活動として取り組んでいます。



高齢者健康推進活動では、健康便りや健康チェックシートの作成、送付を行っています。住民の方が健康に関して必要としているニーズを考え、健康に関する知識の共有や、私たちの日常の様子も盛り込んで健援隊に親しみをもってもらえるよう工夫しています。

防災活動では、現地調査を行い住民の方から災害時の状況や地域の課題を直接伺い、住民の方にあつた防災備蓄品リストを作成しました。リスト作成において市が運営する避難所について知りたいという住民の方の要望に応じて市役所の方からも情報をもらって対応策について検討しています。このほか、住民の方からは先輩方が実施してこられた防災訓練や炊き出しなど一緒に取り組める活動にも誘っていただいています。今後もコロナ禍においても、工夫しながら活動していきたいと考えています。

小児健康推進活動では、子どもたちに健康に対して関心をもってもらい、楽しく学べるように保育園の先生方からアドバイスを頂きながら、栄養と季節の寒暖差について子どもたちに紙芝居やクイズをしながら健康への関心を高める活動をしています。

健援隊の活動は、まもなく10年目を迎えます。これからも、先輩方が築いてこられた子どもから高齢者まで、共に楽しく、主体的に活動することを大切にして、住民の方とのつながりを深められる健康推進、防災活動を行っていききたいと思います。



温故知新 その13

看護学重点シリーズ

小林富美栄監修

山崎美恵子・南裕子・松本女里・

岡部聡子・中桐佐智子・宮内美紀子共著

金芳堂（1980・81）全7巻

（写真にない第7巻は母性看護学です）



今回も、金芳堂看護学重点シリーズの紹介です。第1巻P.16 9-2 日本の看護 6「看護教育」の引用です。「(第二次世界大戦後、)新しい看護教育は保助看法に基づき甲種看護婦養成を中心に始まった。大学病院付属、日本赤十字社看護婦学校、国立病院付属の看護学校が開設され、年々その数を増していった。これらの多くは学校教育法によるものではなく、各種学校であるため、現在もなお、看護教育の大きな問題となっている。

社会の要請は、専門家としての高い教育を受けた看護婦であり、また、管理や教育の面で看護のリーダーが必要となってきた。

わずかではあるが、看護関係の大学が設立された。わが国最初の大学課程看護教育は、1952年、高知女子大学家政学部衛生看護学科で始められ、翌1953年、東京大学医学部に衛生看護学科が設置され、看護を専門とする教育活動、研究活動が行われるようになった。1965年になって、東京大学医学部衛生看護学科は保健学科と名称を変えたが、同学科の看護学講座によって引き続き行われている。1954年には聖路加女子専門学校は聖路加女子短期大学となり、その後1964年に聖路加看護大学となった。1975年には国立千葉大学に我が国最初の看護学部が発足した。」

【高知女子大学はわが国最初の4年制大学の看護専門職養成機関である】ことは、昭和の卒業生だけでなく平成、令和の卒業生も、現在の学生さんもよくご存じのことでしょう。では、それはどのような意味を持つのでしょうか？

この教科書が書かれた1980年(昭和55年)当時、4年制大学の看護教育機関は10大学、入学定員は340名でした。10大学の内訳は、国立7大学、公立1大学、私立2大学です。公立1大学が高知女子大学で、定員は20名、1学年20名を9名の看護教員が丁寧に教育していたのです。

1980年の18歳人口は約158万人であり、大学・短大進学率は31.9%、つまり50.4万人が大学・短大に進学したことになりますが、その中のわずか0.067%＝1万人の中の6.7人が4年制看護系大学への進学者でした。また、1980年の看護師養成機関の入学定員は28,685名(文部省:121施設、定員5,530名、厚生省:603施設定員23,155名)であったことから換算すると、看護系になる学生のうち4年制大学入学者の割合は0.80%ということになります。

この当時(そしてそれ以前)の高知女子大学看護学科卒業生は、99%が4年制大学ではない教育履修者である看護側集団に入って、看護実践することを求められたのです。川島みどり先生は1980年2月の朝日ジャーナル(同窓会会報10号・温故知新その6参照)で、「今日でも『頭でっかちの看護婦は使いものにならない』とか『学問より人柄』、『医師の手足としての看護婦でありさえすればよい』といったことが公然と行われている」時代だと述べられています。

その中で、知識・理論を基盤として思考し、全人的な視点で対象を捉え、自立した看護を目指し、パイオニアとして、変革者として、高度な実践、倫理的調整、教育、研究に邁進されてこられた先輩方の努力が今日の看護における高等教育の発展につながっているのではないのでしょうか。

令和4年度 高知県立大学看護学部
4回生看護研究発表会

令和4年度 高知県立大学看護学研究科
博士前期課程修士論文発表会



令和5年2月21日に看護学部4回生の看護研究発表会、3月4日に看護学研究科博士前期課程の学位論文発表会が感染対策を講じながら開催されました。それぞれが看護研究で探求してきた成果を発表する機会となりました。

ご報告

69期生、修士修了生の同窓生のみなさまに卒業、修了記念品として、モバイルバッテリーを看護学部同窓会より贈呈しました。



寄付のお願い

同窓会への寄付のご協力をよろしくお願いいたします。
寄付金は、同封の振込用紙にてお願いします。ホームページでもご覧いただけます。
ご不明な点はいつでもお問い合わせください。

高知県立大学看護学部同窓会会報26号を発刊することができました。本号では、令和5年3月をもって退職された山田覚先生、森下安子先生から同窓生に向けたメッセージをいただきました。また、幅広く活躍されている先輩方、卒業後1年目の同窓生から近況を寄せていただきました。ご協力いただいた同窓生の皆様、本当にありがとうございます。皆様からのメッセージや記事の編集作業はいつも、看護学部が長い歴史を紡ぎ、つながっていることを実感する作業です。

今後もつながりや歴史を同窓生の皆様感じていただけるような会報をお届けしていきたいと思っております。

(池添・川本・西内)

編集後記

事務局

〒781-8515 高知市池2751-1 高知県立大学看護学部
Fax: 088-847-8750

ホームページアドレス

高知県立大学
<http://www.u-kochi.ac.jp/>
高知県立大学看護学部
<http://www.u-kochi.ac.jp/~kango/>